

<個別目標：防護>

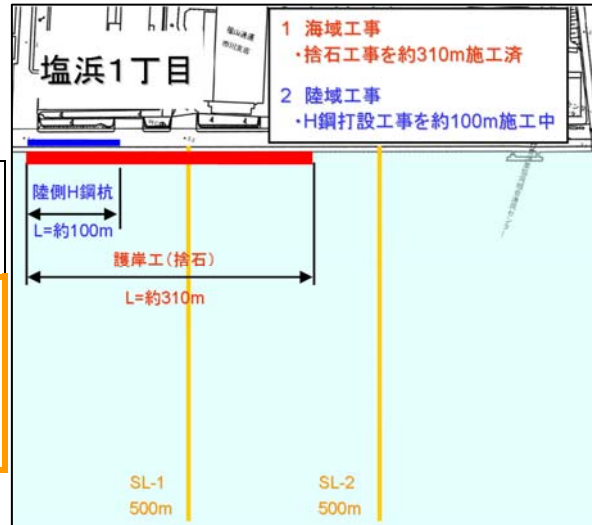
目標達成基準：早急な安全性の確保

“防護”に対する3つの指標

- ① “緊急対応” への指標：既設護岸の補強に必要な石積が確保されたか。
➢ 既設護岸の倒壊を防止
- ② “耐震” への指標：H鋼杭（陸側、海側）が打設されたか。
➢ 海側は石積部の震度5強への防護を確保
➢ 陸側は背後地盤の震度5強への防護を確保
- ③ “越波低減” への指標：傾斜堤の高さがA.P.+5.65mに達しているか。
➢ 天端高A.P.+5.65m(波返工)により越波低減を図る

	実績	状況
①緊急対応	約310m	51.7%
②耐震(H鋼杭:海・陸)	約100m(陸側のみ)	8.3%
③越波低減(+5.65m)	0m	0.0%

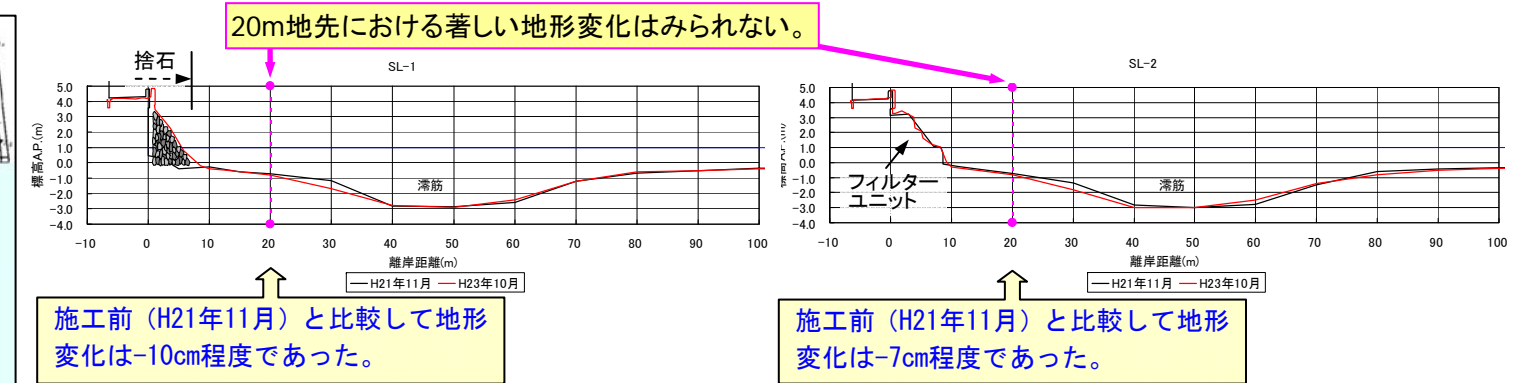
検証結果	① “緊急対応” への指標 ⇒ 52/100 ② “耐震” への指標 ⇒ 8/100予定 ③ “越波低減” への指標 ⇒ 0/100
防護の評価	本年度の結果として ① “緊急対応” については、約52%の施工が完了した。 ② “耐震” については、陸側100mにおいてH鋼杭の約8%の施工が完了した。 ③ “越波低減” について本年度は0%であった。



目標達成基準 2: 周辺海底地形に洗掘等の著しい変化が生じないこと

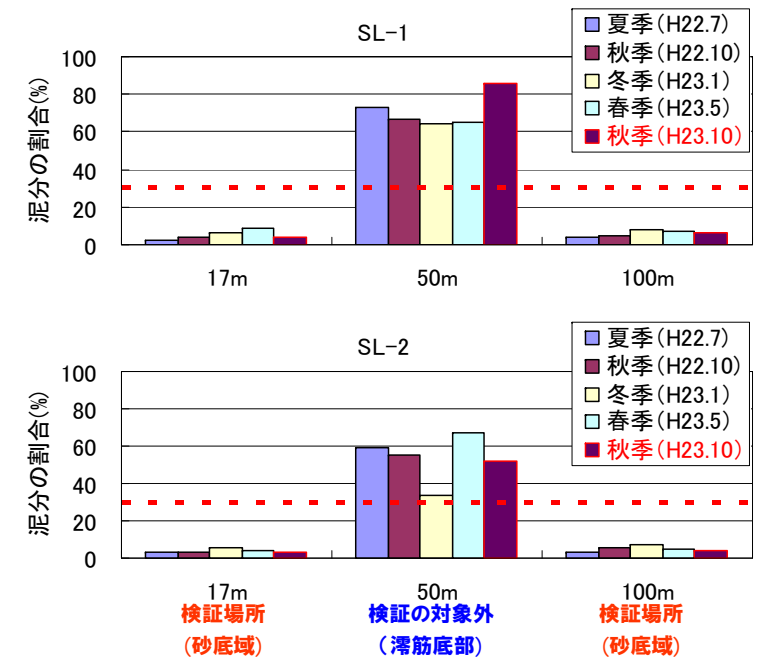
・地形測量

検証項目	目標達成時期	検証場所	基準とする値
地形変化	施行後1年後	20m 地点(のり先)	施工前海底面に対して、±0.6m



・底質(粒度組成)

検証項目	目標達成時期	検証場所	基準とする値
泥分の割合	検証はモニタリング調査の実施毎に行うが、評価は、既設変動を考慮して、施工完了後一年経過後に行う	距離17m付近(砂底域)	泥分の割合が30%を超えないこと
		距離50m(滞筋底部)	生物の生息がほとんどみられないため検証箇所としない
		距離100m付近(砂底域)	泥分の割合が30%を超えないこと



<個別目標：環境>

目標達成基準 1: 改修により一時的に消滅する現状の護岸部潮間帯の生物群集が再定着すること

検証項目	目標達成時期	検証場所	基準とする値
施行前の護岸部潮間帯生物の種類数	施工後5年以内	改修後の傾斜堤護岸の潮間帯(高潮帯～低潮帯)	高潮帯: 潮間帯生物の年間の平均確認種数が3種以上となること
			中潮帯: 潮間帯生物の年間の平均確認種数が3種以上となること
			低潮帯: 潮間帯生物の年間の平均確認種数が3種以上となること

・潮間帯生物の定着に関する検証結果

測線	観測場所	経過年					約2ヵ月後
		施工前夏季 H22.7	施工前秋季 H22.10	施工前冬季 H23.1	施工前春季 H23.5	約2ヵ月後 秋季 H23.10	
SL-1	高潮帯	3	4	2	3	3	
	中潮帯(魚類)	5(0)	5(0)	2(0)	3(0)	2(2)	
	低潮帯	1	0	2	3	6	
SL-2	高潮帯	3	4	1	6	6	
	中潮帯	3	4	2	3	5	
	低潮帯	4	5	4	5	4	

・捨石護岸(SL-1)における施工中の潮間帯動物は低潮帯で多くの種類数が確認されている。
・直立護岸(SL-2)については、季節的な変動はみられるものの種類数は同程度で推移している。

※本年度秋季調査ではウネナシトマヤガイは確認されていない。

検証結果	<ul style="list-style-type: none"> 捨石施工後約2ヶ月が経過したSL-1の潮間帯生物については、中潮帯を除き、種類数が3種以上確認されている。中潮帯については、魚類を含めると3種以上となっている。低潮帯は期間中最多の種類数が確認された。 工事が行われていないSL-2は、季節的な変動がみられたが、種類数については、過年度調査と同程度であり、各層共に3種類以上確認されている。
工事2ヶ月後の評価	施工途中段階ではあるが、捨石工で潮間帯生物の再定着によりハビタットの基盤が概ね形成されていることが確認された。今後、本工事により被覆護岸が施工されたとしても、潮間帯のハビタットとして機能されるものと、考えられる。今後も引き続き、潮間帯生物群集の形成と遷移の状況についてモニタリング調査により検証を継続する。

検証結果	<p>海底地形に関する検証基準</p> <ul style="list-style-type: none"> 検証箇所(のり先)における施工前と施工中の地形変化は-10cm(SL-1)及び-7cm(SL-2)であり、海底地形に関する検証基準「施工前海底面に対して、±60cm」を満たしていた。 <p>底質(粒度)に関する検証基準</p> <ul style="list-style-type: none"> 泥分の割合は、検証箇所である離岸距離17m及び100mでは、20%以下の値であり、底質(粒度)に関する検証基準「泥分の割合が30%を超えないこと」を満たしていた。
施工後2ヵ月後の評価	海底地形については、滞筋の岸側で地盤高低下、沖側で地盤高上昇の傾向が見られたが、のり先においては、大きな変化はなかった。底質(粒度)については、現在までのところ著しい変化は確認できない。